

「ふさわしい礼拝」

(ローマ12・1～2)

一、「神のあわれみによって、勧める」

1節前半に「ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます」とあります。「ですから」と言うことは、ここから新しい話題として語ってはいるものの、それまでに述べた内容を、主として11章で述べた内容を受けて、「ですから、兄弟たち」と語っていることが分かります。「兄弟たち」とは、ローマに興されたキリストを信じる、多くの異邦人キリスト者によって構成されていた教会です。

続いて「私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます」と語られています。が、「神のあわれみ」とは、何でしょうか。11章とつながっていますので、11章で語られたことばから意味を取るのがよいと思います。そうしますと、11章30節より32節を見るのが適当です。すなわち「神のあわれみ」とは、すべての人々に臨んでいて、神のあわれみのみこのことばです。そういう意味で、「ですから、兄弟たち、私は神のあわれみによって、あなたがたに勧めます」と語られているわけです。なお、「勧めます」は、新改訳旧版では「お願いします」です。このことばには、「助

けを求める」「懇願する」の意味がありますから、パウロが高い所からローマの教会員たちに向かつて「勧める」と語っているのではないことが分かります。「何とかそうしてほしい」という気持ちで語っています。

二、「からだを、献げなさい」

1節の続きを見てまいります。「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい」とあります。「からだを献げる」とは、どうということなのでしょう。それは「自分自身を献げる」の意味です。ではパウロは、どのようにして、自身を献げなさいと語っているのでしょうか。「神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として」です。これは、元の聖書本文の順序では「①生きた、②聖なる、③神に喜ばれるささげ物」です。原文どおりの順序で聴いてまいります。まず

「生きたささげ物」です。旧約時代に、動物の献げものを献げるときは動物を屠って献げました。それと逆の概念のことを語っているようです。キリスト者たちが、賛美を献げ、みことばを聞き、聖餐に与ることによって、自分自身を献げることを意味しています。

次に「聖なるささげ物」ですが、「聖」は神のご性質であり、私共が持ち合わせる性質、またつくり出せないものです。ただ神によって現された「聖さ」

に与ることによって、あるいは「聖さ」に触れるときに、「聖なるささげ物」を献げることができるようになります。主イエス・キリストを信じて洗礼を受けますと、私共は世から聖別され、聖なるものとされます。これは神の業です。

次に「神に喜ばれるささげ物」ですが、このことばは「神に受け入れられるささげ物」とも訳されます。新改訳旧版が「神に受け入れられる、供え物」と訳出しています。ささげ物が神に受け入れられるか否かは、重大なことです。礼拝を始め、日々の生活において御心に適わないことを行ってしまい、御霊が悲しまれるときは、「主はきょうの自分の振る舞いを受け入れておられない」と分かるものです。

三、「あなたがたにふさわしい礼拝」

1節3文目を見てまいります。「そして、あなたがたにふさわしい礼拝です」とあります。サラツと読みますと、私共が献げる礼拝は、どういう礼拝が適切であるかを語っているかのように読めてしまいますが、よく読みますと、そうではないことが分かります。「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい」と語られ、「そして、あなたがたにふさわしい礼拝です」とあるからです。ここでパウロが語ったのは、主の日に私たちが集まって献げる礼拝のことでは

なく、先ほど述べたキリスト者の生活そのものが「あなたがたにふさわしい礼拝です」と語られていることに気がきます。それにしましても、「あなたがたにふさわしい礼拝です」は、翻訳によってまちまちです。新改訳旧版は、「そして、あなたがたの霊的な礼拝です」という翻訳が生まれるのはどうということなのか、と誤ってしまいます。実は、翻訳には長い歴史がありまして、ある古代訳が「霊的な礼拝」と解釈したところから、そのような訳があるようです。

たいせつなのは、主イエス・キリストを信じて洗礼を受け、賛美を献げ、みことばを聞き、聖餐に与り、自分自身を献げているなら、主は喜んでおられるということです。あるいは、主イエス・キリストを信じて洗礼を受けたら、世から聖別されて聖なるものとなり、主は喜んでおられるということです。あるいは、自分が行っていることを主が受け入れてくださっていることと知るなら、それは神に喜ばれるささげ物となっていることと知ることです。